
Over the Twilight

ういろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Over the Twilight

【Nコード】

N5425P

【作者名】

ういろっ

【あらすじ】

数年前から時々不思議な夢を見る。徹夜明けの仕事帰り、始発電車の中で眠り込んでしまった璃子は、気がつけばまたその夢の中にいた。「夢先案内人」そう名乗る男がくれた帰りの切符には2週間先の日付。長い橋を渡って電車が着いたのは、5つの島が連なる海辺の町。お姫様になるわけでも悪い竜を退治しに行くわけでもないのだけれど、また不思議な旅が始まった。

1 路面電車

ガラガラと音がして電車の扉があき、明け方の冷たい空気が入り込んできて璃子は眼を開けた。大きな荷物を背負った老婆が一人、ゆっくりとタラップを上ってきて、璃子と反対側の端に座ると、路面電車はまだ扉を締めてのろのろと動きだした。ポイントの切り替えで、車体が脱線するのではないかと思うほどガタガタと大きく揺れたが、璃子は口の中であくびをかみ殺して、窓ガラスに頭を寄せ、外を眺めた。もううつすらと空が明るくなり始めている。

久しぶりの徹夜明けで璃子は疲れ果てていた。

13年物の璃子の愛車は、月曜日に急に調子が悪くなってしまい、修理工場に持っていくと、あれもダメこれもダメといろいろ直すことになって、来週まで帰ってこない。いい加減に寿命なのかもしれないけれど、長年の愛着もあるし、モデルチェンジしてSF映画に出てくるような形になってしまった新型に買い替える気にもなれず、結局ずっと同じ車に乗り続けている。そんなわけで今週は高校の時代以来の電車通勤だ。会社のある駅前から、璃子の住んでいる海辺のアパートまでは、バスかこの路面電車で30分ほどかかる。タクシーを呼べば深夜料金で3千円超。昨夜、10時を過ぎても全然仕事の終わりが見えてこなかったときには、これは始発までやるしかないと腹をくくった。コンビニまで夜食と目覚ましガムと栄養ドリンクを買いに行き、頑張ったおかげで何とか今日は一日休みがとれる。

また、ひどい音を立てて電車が止まった。誰もいない停留所で、儀に数分間止まった後、再び動き出す。ピンポンパンとチャイム

が鳴って、テープに録音されたアナウンスが流れた。

「次は野村、野村。あなたと明日の街を作る、地場産業センターはこちらでお降りください。」

路面電車はガタゴトと揺れながら進む。すり減った木張りの床、てかてか光る黄ばんだ吊革、いつから貼ってあるのかわからない歯医者 の 告 告。 静まり返った明け方の街を 行く路面電車の中は暖かくて、まるで昭和時代にタイムスリップしたようだ。

璃子が大学の時にこの街に移り住んで来てもう10年近くがたつ。そこそこの都会育ちだった璃子には信じられない事に、ここでは電車が1時間に1本ほどしか来ない。更に駅からのバスは3時過ぎでなくなるし、タクシーに乗ると時間はそんなに経っていないのに驚くような料金になる。地元の友達の家で、一人に一台ずつ車があるのには驚いたけれども納得できる。自然が多くて食べ物がおいしい、のんびりした暮らしやすい街だけれど、要するに田舎、車がなければ何もできない様な土地だった。

そんな中で、旧国営鉄道の駅と海辺の街をつなぐこの路面電車は、漁港の朝市が始まる5時過ぎから、最終の寝台特急が出る深夜の0時過ぎまできつちりと1時間に3本ずつ、他の交通機関が止まる嵐の日も、大雪が降った日でも雪をかきわけて、ガタゴトと走り続けている。何度か経営難で廃線になりかけたらしいけれど、そのたびに地元の反対運動が起こって存続してきたそうだ。水色の背景にピンクのお花が書いてあったり、正面が黄色の猫の顔になっていたり、バラエティに富んだレトロな車体で頑張り続ける路面電車に、何故か愛着がわいてしまうのも判らなくもない。「効率」や「採算」では測りきれない大切なものをこの電車と一緒に運んでいる様な気がする。初めて乗った時は、ガタゴトというよりはグラグラに近い乗り心地の悪さにびっくりしたけれども、慣れてしまった今

ではそのゆれが疲れた体に心地いい。不思議な安心感に包まれて
璃子はまた眼を閉じた。

カタン、カタン、カタン、カタン。

少し目を閉じるだけのつもりが、いつの間にか眠ってしまったとい
たようだ、規則正しく響く音によびさまされた璃子はゆっくりと目
を開けた。

すっかり夜が明けて朝靄が白く立ちこめている。路面電車は長い
鉄橋の上を走っていた。

海辺まで来た路面電車は、そこで右に折れて終点まで海沿いを走る
のだが、その途中大きな川の河口にかかった橋を渡る。璃子が座
っている席からは一面に海が見えて、まるで海の上を走っているよ
うだった。アパートに帰るにはこの橋の手前の停留所で下りな
ければいけないから、乗り過ごしてしまった事になるけれど、こん
な幻想的な朝焼けの海が見れたのだからこれはこれでいいかもしれ
ない。

カタン、カタン、カタン、カタン。

路面の上を走っていた時とは別の乗り物のように軽快に、電車は
鉄橋を渡っていた。いつの間にか、さっき乗ってきた老婆はいな
くなくなって車内には璃子一人だった。

内陸生まれの璃子は、この街に来るまでほとんど海に来た事がな
かった。たぶん小学校の時の臨海学習と、一度家族で四国に旅行
に行った時、それくらいしか覚えがない。だから、「あんなとこ

る、寒くて湿っぱいだけだからやめておきなさいよ。」という友人の忠告を押し切つてまで、今住んでいる海辺のアパートを借りることにした。それから5年以上、毎日のように海を見ているけれどもいまだに飽きる事がない。

カタン、カタン、カタン、カタン。

それにしても、この鉄橋はこんなに長かつただろうか。いつまでも続く規則正しい音に、璃子はふと疑問を感じた。後ろの窓を振り返つてみたが、そこにあるはずの川と街は朝霧で真っ白に覆われていて何も見えなかった。ため息をついて璃子が前を向き直すと、誰もいなかった向かいの席に一人の男が座っていた。

「……ルイ。」

璃子はようやく、自分が夢の中にいる事に気がついた。

2 夢先案内人

数年前から璃子はたまに不思議な夢を見るようになった。普段はあまり夢を見ないし、見たとしても支離滅裂な内容だったり、起きた時にはどんな夢だったのか忘れているのだけれど、その夢だけはやけに鮮明で忘れる事が出来なかった。その夢の中で、璃子は旅人になっていろんな所へ行った。大きな木々の上にある都市、魔法使いのいる街、恐竜がいる国。まるでファンタジーの世界に入り込んだみたいで、お姫様になるわけでも悪い竜を退治しに行くわけでもないのだけれど、璃子はその夢を見るのを楽しみにしていた。

そして、その夢を見るときは必ず一人の同じ人物が出てきた。

「夢先案内人」

初めて出会ったときに、彼はそう自己紹介してきた。いつも同じジーンズに白いVネックのシャツ、肩を超える髪は無造作に後ろで一つにくくっている。年は璃子よりも10ほど上だろうか、顔立ちはどう見ても日本人なのに何故かその髪と目は鮮やかな緑色をしていた。その緑色さえ無ければ、彼は璃子の知っている人にたぶんとてもよく似ているはずだ。璃子がその人を最後に見たのは15年以上前だけれども、その人が今も生きていたらきっとこんな感じになっているだろう。だから、彼が好きな名前で呼んでいいと言ったときに、璃子は迷うことなくこの名前を選んだ。

「ルイ。」

目の前に腰かけていた男は、璃子に呼ばれて微笑んだ。

緑の目が細められて、感じのよい口元が少し上がると右の頬に小さなえくぼが出来る。そうやって、彼はいつも穏やかにゆっくりと笑う。

「久しぶりだね、リコ。元気にしていた？ 顔色が悪いけど、ちゃんと食べている？ また、仕事のしすぎで疲れているんじゃないかい？」

久しぶりに会ったルイの口から最初に出た言葉に、璃子は思わず微笑んだ。確かに、徹夜明けの上に、もう帰るだけだからいいだろうと化粧も直さず会社を出てきてしまったのだから、ひどい顔をしているのはわかってはいるが、まるで実家の父親みたいな言い様だ。心配性な所もルイはあの人に似ている。

「疲れていたけど、ルイにあえたから大丈夫。長い間逢えなかったから、もう来てくれないのかと思ってた。」

「ごめんね、リコ。」

ルイは本当にすまなそうに謝ったが、逢えなかった理由は言わなかった。璃子はルイについて何一つ詳しい事を知らない。何の前触れもなく、ふらっと璃子の夢の中へあらわれて不思議な旅行に連れて行ってくれる自称「夢先案内人」。でも、詳しいことなど何も知らない方がいいのかもしれない。何しろここは夢の中なのだから。そして、彼が優しい人で、璃子が彼にあうのをいつも楽しみにしているという事は変わらない。

「ルイ。今日はどこへつれていってくれるの？」

ルイはにっこりと笑って立ち上がると、璃子の前まで来て一枚の紙切れを手渡した。青い海と白い浜辺に、ヨーロツパのどこかにあ

りそんな街並みが続く。そんな写真を背景に、真ん中には大きな白文字でこう書かれていた。

「ジエール鎖島周遊切符？」

「そう。今回の行き先はジエール鎖島。海に連なる5つの島にそれぞれ街があつて、この切符で島を行き来する電車に自由に乗れる。そしてこれが帰りのこの電車の切符。」

もう一枚の切符はさっきの物よりずいぶん重くて、しっかりとしていた。濃紺の厚紙に、綺麗な金色の飾り文字で、ジエール鎖島と璃子の住む町の名前が矢印で結ばれて印刷されている。そして、その下には今日から2週間後の日付。

「旅の条件は覚えている？」

「ええ。この世界の法則に従うこと。ここが私にとって夢の中だと人には言わない事。必ず時間に間に合うように帰ってくる事。」

「それと、恋をしない事。」

ルイがもう一つ付け加えた条件に璃子はかすかに眉をひそめた。

「いつも思うのだけど、最後の一つは余計じゃない？」

「うーん。確かにこれは自分の意思でどうこうなるものではないけれど、夢の中で恋をしてもリコが傷つくだけだからね。」

ルイがおおきな手を伸ばして璃子の前髪をかき上げたので、璃子は眼を閉じた。額に柔らかく温かいものが当たる。昔大好きだった童話に幸運を呼ぶ魔法のキスというのがでてきた。ルイがいつも別れ際にくれるのは、そういうとても優しいものだ。

「楽しんでおいで、リ」。

「ありがとう。」

そっと手が離れていき、璃子がゆっくりと目を開けるとそこにはもうルイの姿はなかった。

3 水晶島駅

冷たいガラス窓の向こうで朝霧は次第に薄くなっけいき、澄んだ青い海がどこまでも続いていた。ジジジッ、というかすかな雑音の後、車内放送のテープからオルゴールが奏でる古い童謡にのせてアナウンスが流れ出した。

「・・・本日は四葉線をご利用いただき誠にありがとうございます。間もなく、終点水晶島駅でございます。どなた様も、お忘れ物なきようお願いを 부탁드립니다。またのご利用を心よりお待ち申しております・・・」

璃子はそれまで何気なく寄りかかっていた窓に顔を押しつけるようにして電車の行く先を見つめた。海の上へ続く鉄橋は少しずつ低くなりながら緩やかに右にカーブして、その先、朝靄の中からかすかに街影が姿を現した。

「すごい、綺麗・・・」

璃子は思わずつぶやいていた。

ほとんど平らな島なのだろう、窓からは低い屋根がひしめくように続いているのが見えた。その中からまるでつくしの様にぴよぴよこと先のとがった塔が頭を出している。そして驚くのは、その家々の色だった。島を囲む白い岸壁のすぐ向こうに続く街並みは、赤、黄、青、緑、オレンジ、ピンク、目の覚めるような色で塗られていた。まるで、プリズムの光が集まったようだ。虹色の街が海の上に浮いていた。

電車が甲高いブレーキの音をあげながらゆっくりと止まった。ガラガラと音がしてドアが開いて、車内の空気が変わった。海の匂いがする。

それでも璃子はまだ席に座ったままだった。鼓動が大きくなって、おなかの奥の方がぎゅっと締めつけられるような感じがする。

この電車から一步外に出れば、そこは本当に何かがあるかわからない別世界が待っているのだ。璃子は目を閉じてゆっくりと何回も深呼吸をした。それから、膝の上で握りしめていたカバンを肩にかけると、勢いをつけて立ち上がった。いつまでもここに座っているわけにはいかない、旅はもう始まっているのだ。

そこは駅というにはあまりにもささやかでさびれた場所だった。

ペンキのはげかけた白いアーチ型の屋根とベンチが一つあるだけで、改札も、券売機も何もない。辺りに人気はなく、遠くから岸壁に打ちつける波音と海鳥の鳴き声が聞こえるだけだった。屋根の下にはやはりペンキがはげてさびかけた看板が一つだけ、海風に吹かれてたよりなさげにぶらぶらと揺れていた。

「すいしょうじまえき、よね。」

璃子は声に出して看板を読んできた。

夢の世界で便利なのは、何処に行っても言葉に困らない事だ。

話せないはずの英語で外国人とぺらぺらと会話をする夢を見るように、ここでも読めるはずのない文字が読めて、わからないはずの言葉が理解できる。看板に書かれているのは、日本語でもアルファベットでもない幾何学模様が集まったような文字だったけれど、璃

子にはちゃんと読む事ができた。

夢の中で知らない街に突然やってきた時、まずどうしたらいいのかも今までの経験から大体わかっている。最初の頃はわけも判らず右往左往するだけだったから、だいぶ進歩したものだ。璃子はとりあえずベンチに腰を下ろすと、カバンから携帯端末を取り出した。これも、夢の世界で使える便利機能だ。パネルに軽く触れると、普段待ち受けにしているクラゲの画像の代わりに、かわった紋章のホログラフが現れた。二重の円の中で大きく羽を広げたペガサス。その周りを囲む金色のリボンには何の頭文字なのだろうか「A・T・C」の三文字が浮かび上がっている。まるで某国政府捜査機関とかのマークみたいだ。

「夢の中とはいえ、ドラマの見すぎかな。」

最近深夜に再放送されていた海外のSFドラマを思い出して苦笑いしながら、璃子はパスコードを打ち込んだ。紋章は回転しながら消えていき、かわりに画面にアイコンが並ぶ。いつもの携帯の様に電話やメールは使えないけれど、残り時間を表示してくれる「カウンター」やこの世界の「用語集」などいろいろと便利な機能が使えるようになっていた。こんなファンタジックな世界にいて、いつもと同じように携帯をいじっているのは、なんだか雰囲気が悪れる様な気もしたけれど、璃子は「map」のアイコンを選んだ。

すぐに画面にジェリービーンズのような形をした島が出てきた。島の一番南の端に璃子の位置を示す赤いマークが点滅している。もしかして廃墟の街に来てしまったのかと、少し心配していたのだが、ただ単にこの駅が街はずれにあっただけの様だ。地図ではもう少し北に行くと大きな港や市場がある。漁港なら朝早くても人がいるだろう。画面を操作して地図を広域にしていくと他にも4つの島が現れた。璃子が今いるのが、一番西にある2番目に小さな島。隣が一番大きな島で、その隣が中くらい。その次がま

た大きな島で、最後の一つは点の様に小さな島だった。

なんだかわくわくして来て、璃子は携帯をしまつとベンチから立ち上がった。

「よしつ。 行動開始！」

気合を入れて歩き始めた璃子は、ふと思いついて後ろを振り返った。駅にぼつんと止まった黄色い路面電車。 けれどそこに描かれた水玉模様の蝶ネクタイをつけた黄色い猫は、まるで璃子を見送る様子にっこりと笑っていた。

4 青空市場

それにしても、なんて面白い街だろう。とりあえず大きな通りを目指して細い路地を抜けながら、璃子はきよろきよろとあたりを見回した。朝が早いからなのか、辺りに人の姿が見えないからどんな人達が住んでいるのかはまだ分からないけれど、すり減った石畳の道、家や街灯の形などはいかにも古いヨーロッパの街並みといった感じだ。けれども、この色。何をどう間違っただろうか。風になっってしまったのだろうか。璃子の左手にあるのは真っ青の壁に真っ白なドアの家で、そのとなりはラベンダー色、その向こうは目の覚めるような黄色だった。対する右手側はシヨッキングピンクに緑色のドア、そのお隣さんは壁軒先まで真っ赤で白いベランダにはやはり燃えるような赤色のゼラニウムが並んでいた。日本では絶対あり得ない配色だけれど、ここまで徹底されていると逆に統一感のある街並みに見えるから不思議だ。緑と白の縞模様のカートンがかかったオレンジ色の家を横切ろうとして、璃子はふと足を止めた。

唐突だが、璃子の職場は全員私服だ。クライアントの前で失礼にならない程度にきちんとしていて、荷物を抱えて走りまわっても大丈夫な服装、という暗黙の了解さえ守っていたらうるさい事はいわれない。というわけで仕事帰りの璃子は、黒のパンツに白いTシャツ、その上から灰色の麻のジャケットという至極無難な恰好をしていた。でも、ここの住人がこの家と同じような色彩センスのファッションだったらどうしようか。今まで行った場所は、マントを羽織っているとか、変な形の帽子をかぶっているとかはあったけれど、恥ずかしくてどうしようもないと言う程じゃなかった。オレンジ色のカボチャパンツに緑と白のしましまのシャツ、なんていうピエロみたいな恰好をした自分を想像してしまっただけで璃子は思わ

ずうめき声をあげた。

気を取り直して路地をいくつか曲がっていくと、行く手から何か聞こえてきた。足音、物音、話し声。街の喧騒の中に時折混じる笑い声に、璃子はちよつと安心した。そこにどんな人がいようと、笑っていられる人達なら大丈夫だ。少し足を速めて、璃子は路地を抜けた。

そこは大きな青空市場だった。広場いっぱいには色とりどりの天蓋を広げた屋台が立ち並び、物や人でごった返していた。市場の右側はすぐに港になっていて、今まさに魚が水揚げされている。日に焼けた太い腕をしたおじちゃん達が魚でいっぱいの木箱を豪快に船から上げると、次の人がぬれた石畳の上を滑らせて運んでいく。市場は活気の良い掛け声とざわめきであふれていた。行き交う人々の顔はラテン系に近い感じで、黒髪や恰幅のいい人が多かったけれど、璃子が一番安心した事にみんな普通の色の普通の服を着ていた。

夢の中であろうとなかろうと、旅先で市場に来るほど面白い事はないと璃子は思う。普段スーパーマーケットにしか縁がない現代人ならなおさらだ。璃子は人ごみにまぎれて端から端まで屋台を覗いていった。一番多いのは魚屋。ほとんどが見た事があるような魚だったけれど、中には2mほどもある細長い魚や人の頭より大きな貝なんかもおいてあった。他には、色とりどりの野菜がうずたかく積まれた八百屋。巨大なハムや輪にしたソーセージがつり下がっている肉屋、麻袋と天秤ばかりに囲まれた乾物屋。見慣れたものでも並べ方が違うだけで楽しくなってくる。そして一番

端には、とれたての魚を揚げてパンにはさんだ様な物を売っている屋台が何軒が続いていた。

「お譲ちゃん、おいしいよ。味見してみるかい？」

屋台の向こうからどつてり太ったおじさんが揚げ魚のきれはしを差し出してきたので、璃子はあわてて断った。　　どつという理屈になっているのかわからないけれど、向こうの口から出てくるのは全然知らない言葉なのに璃子の耳に入ると意味がわかる。　「ありがとう。」　　といったつもりの璃子の言葉も、口から出る時には知らない音に変わっていた。

さすがにはしゃぎ過ぎて疲れてきた璃子は、市場の横にある小さな公園にベンチがあるのを見つけて、道を横切ろうとした。　その瞬間、

「どけどけっ！！」

すごい勢いで何かが迫ってくるのが目に入り、璃子は慌てて後ろに飛びのいた。　ぶつかるのは避けられたけれど、石畳に足を取られて見事に尻もちをつく。

「ばかやろう！　どこ見て歩いてるんだ、気をつけろっ！」

強面の男が手綱を引きながら振り向いて大声で怒鳴る。　ざわざわと周りの視線が集まるのがわかった。　普段なら恥ずかしくて消え去りたい様な気分になっていただろうけど、璃子はペタンと地面に座り込んだまま茫然と、走り去っていくそれを見つめていた。　「

荷馬車」というのが璃子の知っている中で一番それ近い言葉だろう。　確かに後部の上半分は、映画でよく出てくるような荷馬車の恰好

をしていた。けれど、馬の代わりに荷台を引いているのはどう見てもダチヨウ。そして、荷台には車輪がついていなかった。ぶかぶかと宙に浮く木の箱をダチヨウがひっぱっている乗り物、これをなんて呼べばいいのだろう。

油断していた。この人たちも市場の雰囲気もあまりにも現実的だから、ちよつと海外旅行にでも来た様な気分になってすっかり油断していたのだ。ここは、何が起きても不思議ではない、璃子の常識が通じない世界だという事を忘れかけていた。

「あんだ、大丈夫かい？」

立ち上がらない璃子を心配して、屋台のおばちゃんが近付いてきた。包容力満点な体型に花柄ワンピース姿で、その顔はいかにも人がよさそうだった。ようやく我に返って、璃子はあわてて立ち上がった。

「すみません。大丈夫です。」

「大丈夫って、あんだ顔色が真っ青じゃないか。ちよつとこつち来て休んでお行きよ。」

返事をするより前に、おばちゃんは璃子の腕をつかむと彼女の店の前まで引つ張っていった。その屋台は「ジューサーバー」みたいなものだろうか、色とりどりの果物と、ピッチャーに入ったカラフルなジュースが台の上に並べられていた。店の前には黄色い日除けが張ってあって、璃子はその下にある椅子に座らせられた。強引なおばちゃんだけれど、今の璃子にはありがたい。

「これを飲んだら、ちよつとは気分がよくなるよ。」

屋台の裏から戻ってきたおばちゃんがテーブルの上に、オレンジ色

飲み物が入ったグラスを置いた。

「すみません。ご迷惑をおかけして。」

「あなたが謝る事じゃないさ。あの男の運転が荒いのは昔っからなんだよ。今度、とっちめておいてやるからね。」

おばちゃんが笑いながら袖をまくったたくましい腕をたたいたので、璃子もつられて笑ってしまった。

さつきまで、緊張していた肩の力が抜けていく。単純だと言われるかもしれないけれど、こんないい人がいるのだからやっぱりこは悪い世界ではないと思う。でも、さつきの「馬車」は何だったのだろう。確かに宙に浮いていた。車輪の音がしなかったから、璃子もあれが近付いてくるのに気がつかなかったのだ。街の様子を見る限り、ここが科学技術の発展したところだとは思えない。そうすると、やっぱり魔法とかなのだろうか。確かに以前聞いた「魔法の国」ではいろんなものが宙に浮いていたりしたけれど。難しくなってしまういそうな思考を振り払って、目の前のジュースに手を伸ばしかけた璃子はふと或る事に思い当った。あわてて、カバンの中を探す。

「ない……。」

予想通りというか、カバンの中を隅から隅までみても璃子の探すものはなかった。

「どうしたんだい？」

おばちゃんが心配そうに聞いてきた。たぶんさつきより一段と真っ青になっている顔をあげて、璃子は恐る恐るカバンから財布を取り出し、中から千円札を引き抜いた。

「あの、このお金、使えますか？」

璃子の手からお札を受け取ったおばちゃんは、目を細めてそれを見にかざした。

「変わった紙だねえ。　これがお金なのかい？」

帰ってきた絶望的な答えに、璃子はガクンとテーブルに突っ伏した。今まで別の場所に行ったときは、ルイがいつも生活に困らないだけのお金を渡してくれていた。今回渡されたのは帰りの切符だけ。お金の事なんて今の今まで忘れていた。

(ルイのバカヤロー……)

にじみ出てきそうな涙をこらえて、璃子は心の中で叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5425p/>

Over the Twilight

2011年10月7日15時20分発行